



LUI「公募研究 A」成果報告書

研究課題（和文）：

明治期の雑誌における小説と口絵・挿絵の
関係についての研究

研究課題（英文）：

A Study into the frontispieces and
illustrations attached to novels on Meiji
literary journals

申請者名・所属先：

出口智之・総合文化研究科超域文化科学専
攻比較文学比較文化コース

海外招聘者名：

なし

1. 研究の目的

近代の日本における文学作品と挿絵の関
係については、従来、画工が完成原稿を読ん
で自由に描くという、現代同様の工程を前
提にした研究がほとんどであった。しかし
ながら、出口のこれまでの研究により、少な
くとも明治期には、戯作者が起筆以前に下
絵を描いて画工に指示する、近世文芸の伝
統が受け継がれていたことが判明している。
すなわち、いわゆる近代文学の作家たちで
あっても、多くは江戸の作者と同様、本文の
執筆以前に口絵や挿絵に指示すべく、下絵
（指示画）を描いていたのであり、その慣例
は少なくとも明治後期、ジャンルによって
は昭和初期まで続いていたのだった。制作
の主体や先後関係に関わる、この基本的な
事実を看過したため、従来の研究には少な
からぬ解釈の誤りが含まれている。

本研究では、こうした視点にもとづき、明
治期の新聞雑誌に掲載された作品について
網羅的な調査を行い、小説に対する口絵・挿
絵の機能や意味を抜本的に再検討したい。

2. 研究開始当初の背景

この分野における研究は、実質的に、ほぼ
出口のものしか存在しない状態であった。

もちろん、小説と挿絵のコラボレーショ
ン効果に関する研究は国文学研究の分野で
行われており、また美術史分野においても、

明治の印刷画に関する研究は着実に進みつ
つある。しかしながら、それはあくまで作家
側・絵師側に特化した研究であったか、もし
くは上記のとおり、画工が完成原稿を読ん
で自由に描くという工程を前提にしたもの
ばかりであった。一方、江戸文化の研究者に
とっては、江戸の絵入り本の制作過程で作
者が絵も描いた稿本を作っていたことはご
く自明であったが、そうした研究者が明治
文化に踏みこんで論じることも行われてこ
なかった。

翻って、2000年代に入り、特に明治期の
木版多色摺口絵に関するデータベース構築
が飛躍的に進んでおり、ある程度の研究環
境は整いつつあった。これらのデータベー
スの活用に加え、そこから洩れた石版・写真
版や、新聞等の墨摺の挿絵も総合的に把握
し、かつ江戸文化からの連続という視点で
着想したのが本研究である。

3. 研究の方法

出口のこれまでの研究において、小説の
内容と明らかに齟齬している絵は、起筆に
先立って作家が指示を出したあとに構想が
変化した可能性があり、絵の中に小説の原
構想が残っている事例が存在することが明
らかになっている。逆に、本文では詳述しな
い場面・情景などを意図的に絵に描かせ、協
奏的な効果を狙った例も少なくない。本研
究は、すでに得られているこうした知見を
もとに、明治20～30年代の新聞・雑誌に掲
載された作品の調査を進め、さらなる研究
の進展を図る。

具体的には、『都の花』や、すでに口絵の
み調査を終えた『文芸倶楽部』、さらに『読
売新聞』『東京朝日新聞』といった雑誌・新
聞に掲載された口絵・挿絵を対象とし、1.小
説の内容を把握、2.口絵・挿絵の取材した場
面を特定、3.内容的な符合／齟齬や小説に対
して持つ意味を検討、4.その積み重ねにより
当該媒体を取巻く状況を解明、という工程
で研究を進める。

4. 研究成果

本研究においては、特に第二次『新小説』

に掲載された口絵・挿絵を網羅的に調査し、雑誌としての特色や、上記のような様々な事情や性格を持つ作品の存在を多数明らかにすることができた。その結果、明治期の作家たち、たとえば幸田露伴・広津柳浪・島崎藤村・田山花袋といった著名な作家であっても、口絵・挿絵を戦略的に活用したり、あるいは逆に文学作品の内容が指示しておいた絵画の存在に縛られていたりしたことが解明された。

また、『読売新聞』に掲載された尾崎紅葉の挿絵に焦点を当て、調査と分析を行った。これにより、創刊より長く挿絵を用いてこなかった同紙が、明治28年に挿絵入りに方針転換した際、紅葉が積極的な挿絵の活用を試み、他紙にはない斬新な挿絵を展開したことを明らかにした。具体的には、人物を描かず、小物だけでその人物の存在を暗示させる「留守もやう」(鏑木清方)、花でヒロインを表現するなどの象徴性を帯びた挿絵、「俎板の鯉だ!」のような比喻表現に取材した挿絵など、多種多様な試みを行っていた。そのなかには、奏功したものもそうでなかったものもあるが、いずれにしてもそれは、雑誌のようにわずかな数ではなく、連載時に毎回挿絵を入れられる新聞ゆえの戦略であり、そこに近世の絵入り本文化との接続を見ることができた。

こうした研究成果を反映して、明治文学史をあらためて考えなおす対談や、明治の美術界に大きな影響力を有していた岡倉天心に関する講演などを行った。特に、当センターでおこなった2度の講演については、現在講演録をブックレットにまとめるべく作業中であり、2021年度中には公開予定である。

5. 主な発表論文等

[図書]

- ・ Humanities Center Booklet シリーズにて講演録を刊行準備中

[雑誌論文]

- ・ 出口智之「第二期『新小説』における文学と絵画—口絵・挿絵の戦略と羈絆—」(『比較文学研究』105号、2019年12月、6~26頁)

- ・ 出口智之「尾崎紅葉「金色夜叉」の挿絵—『読売新聞』における絵入り小説の挑戦—」(『湘南文学』第55号、2020年3月、139~153頁)

- ・ 西田谷洋・大橋崇行・木村洋・出口智之「シリーズ・近代現代文学研究座談会明治篇 明治から「近代文学」を考える」(『文学+』第2号、2020年3月、7~45頁)

- ・ 出口智之「尾崎紅葉「多情多恨」の挿絵戦略—自筆の指示画から考える画文学—」(『国語と国文学』第97巻第5号、3~19頁、2020年5月)

[学会発表]

- ・ 出口智之「明治期絵入り新聞小説と単行本の挿絵戦略—尾崎紅葉「多情多恨」に即して—」(東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大会、台湾大学、2019年11月2日)

- ・ 出口智之「尾崎紅葉「多情多恨」の挿絵—新聞連載と単行本の相違から—」(第7回文学と美術研究会、東京大学、2019年12月1日)

[その他]

- ・ 教育講演：第18回 HMC オープンセミナー「文学研究と美術研究の越境—明治小説の口絵・挿絵を考える—」、東京大学伊藤国際学術センター、2019年11月25日

- ・ 教育講演：第27回 HMC オープンセミナー「明治期新聞・雑誌の口絵・挿絵を考える」、オンライン開催、2020年10月30日

- ・ 教育後援：岡倉天心市民研究会第38回研究会「岡倉天心と根岸党—明治文人とのつながり」、横浜市開港記念会館、2021年2月14日

- ・ 講演録：出口智之「岡倉天心と根岸党 岡倉の活動支えた党人脈」(『天心報』38号、2021年4月、1~22頁)